Ⅳ　研究奨励校・研究指定校における研究実践

1　室蘭市学力向上事業に関わる研究奨励校

（1）　室蘭市八丁平小学校

（胆振管内小・中学校教育実践研究奨励校）

【研究主題】

『　豊かな学びをする子の育成　』

～確かな学力の定着を目指した、「教えて考えさせる授業」の実践研究～

（2）　室蘭市立本室蘭中学校

【研究主題】

『基礎的・基本的な学習集事項を身に付け、
筋道を立てて考えたり表現したりする生徒の育成』

～授業工夫の実践による基礎的・基本的な学習事項の定着を通して～

2　室蘭市パイロットスクール事業に関わる研究指定校

（1）　室蘭市立高砂小学校

【研究主題】

『　確かな学力を育てる授業の創造　』

～　話す力を伸ばす国語科の指導法の工夫　～

（2）　室蘭市立高平小学校

【研究主題】

『熱心に考え、取り組むことのできる子の育成　』

～　「気づき」を引き出すために、積極的に考え、
わかる喜びを味わえる学習を通して　～

（3）　室蘭市立桜蘭中学校

（胆振管内小・中学校教育実践研究奨励校）

【研究主題】

『　人と協調し、よりよく生きようとする心豊かな生徒の育成　』

～　書いたり話し合ったり表現活動の工夫を通して　～

室蘭市立八丁平小学校

Ⅰ　研究主題

豊かな学びをする子の育成

～確かな学力の定着を目指した、「教えて考えさせる授業」の実践研究～

Ⅱ　主題設定の理由

２１世紀は、「知識基盤社会」の時代といわれている。この「知識基盤社会」を生き抜いていくために必要な主要能力が、新学習指導要領の理念である「生きる力」である。生きる力を支える「確かな学力」を身に付けさせることが必要である。

また、八丁平小学校の学校目標は、「自分で考え、進んで勉強する子（知）」、「思いやりの心をもち、助け合う子（徳）」、「明るく元気で、たくましい子（体）」である。

「進んで勉強する子」は、まさに「豊かに学ぶ子」である。

そして、学校長の学校経営方針の中で、「授業力を高めることは最大の使命である。」とある。

子どもたちに確かな学力を身に付けさせるためには、我々の授業力の向上が不可欠である。

以上の理由から研究主題を設定した。

研究主題で目指す「豊かな学びをする子」をさらに具現化したもの、及びそれぞれの研究仮説やその視点は以下の通りである。

（１）基礎的な知識や技能を身に付けた子ども
（２）学んだことや考えたことを的確に表現できる子ども
（３）身に付けた知識や技能を足場に学びを深められる子ども

研究仮説①

教師が知識や技能を的確に説明したり、児童が算数的活動を行ったりすることで、基礎的な知識や技能を身に付けた子どもになるだろう
（説明段階における仮説）

視点１

・知識や技能を的確に伝える際の説明を工夫すること

研究仮説②

身に付けた知識や技能を説明したり、記述したりする言語活動を充実させることにより、学んだことや考えたことを的確に表現できる子どもになるだろう（理解確認段階における仮説）

視点２

・知識や技能を確実に定着させる学習指導を工夫すること

研究仮説③

様々な学習形態の中で、協同学習の考え方を取り入れたり、思考が深まる発問や課題を提示したり、自己評価を行ったりすることによって、学びを深められる子どもになるだろう（理解深化段階及び自己評価段階における仮説）

視点３

・学習形態を工夫すること
・協同的な学習に関すること
・発問や課題に関すること
・自己評価に関すること

・宿題、家庭学習の充実　・学習環境の整備　・言語活動の充実　・朝学習の充実　・学習への構え　・ＵＤを取り入れた授業作りと学級経営　・読書指導の充実　・パワーアップタイムの充実　・ＴＴ支援の共通理解

Ⅲ　研究内容

（１）「教えて考えさせる授業」の実践

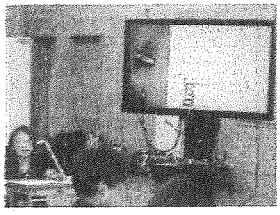
1、八丁平小学校「教えて考えさせる授業」の実践概要

指導過程		概要
教える	予習確認	・教科書を読んでおく。問題を解いてみる。 わからないところに付箋を貼る。 ・本時の目標達成のために必要な知識・技能を確認するために、問いかけたりフラッシュカードなどを用いたりする。
	説明	「考えさせる」ために必要な知識・技能を教える。 ○具体物や映像（アニメーション）を見せる。 ○いろいろな例をあげて説明する。 ○比喩を使って説明する。 ○操作活動を取り入れる。 ○作業させる。 ○比較させる。 ○教科書を音読する。
考えさせる	理解確認	「理解深化」のための足場を固める。 ○類似問題。 ○数値のみを変えた問題。 ○教科書の練習問題。 ○教師が説明したことを、ペアなどで説明し合う。
	理解深化	ジャンプの課題・考えがいのある問題を提示する。 ○間違い探しや穴あき問題。 ○児童による問題作り。 ○誤答修正問題。 ○誤答しそうな問題。 ○教科書などの発展問題。学力テストＢ問題。 ○小グループなどでの協同解決、討論。 ○試行錯誤によりコツを体得させる。
	自己評価	より深い理解を目指すと共にメタ認知力を付ける。 ○分かったこと、分からなかったこと、大切だと思ったことを書く。 ○チェックリストへの記入や挙手による振り返りを行う。 ○個人で問題を解く。

導入で、前時までの内容をフラッシュカードで行うことにより、本時の目標を達成するための足場を固める。

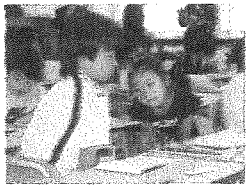
フラッシュカードを用いた確認

子どもに身に付けさせたい知識や技能をわかりやすく教師主導で教える。一方的な説明ではなく、具体物やＩＣＴ、対話的な説明、算数的な活動を通して、丁寧にわかりやすく説明する。



実物投影機を用いた説明

児童同士で説明し合ったり、算数的な活動を行ったりして理解深化への足場とする。



ペアで説明し合う児童

誤答修正問題、誤答しそうな問題、発展的な問題など深い理解を導く理解深化課題を設定し、身に付いた知識や技能を活用する学習活動に取り組ませる。

授業を振り返ることにより「何を学んだのか」「何が大切だったのか」「まだ、わからないことは何か」を考えることができる。自己評価を行うことにより、より深い理解となる。

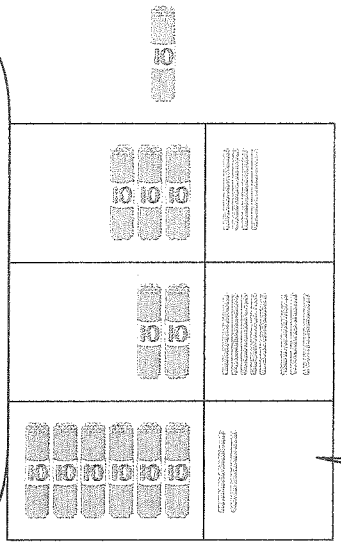
２、研究内容の概要

（１）研究内容①（研究仮説①に関わること＝説明段階）

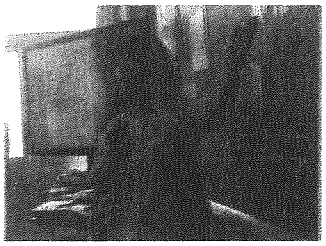
視点１　知識や技能を的確に伝える際の説明を工夫すること

子どもに身に付けさせたい知識や技能をわかりやすく教師主導で教える。一方的な説明ではなく、具体物やＩＣＴ、対話的な説明、算数的活動を通して、丁寧にわかりやすく知識や技能を伝えていくことが大切である。

＜実践例　２年算数「たし算とひき算のひっさん」＞

		学習活動	備考（○留意点◎評価＊形態）
教える	説明15分	○前時の確認　３４＋１２の筆算の仕方を振り返る。	○筆算の説明の仕方を全員で確認する。
		○説明 数え棒を黒板で操作しながら説明する。  ①一の位を計算します。 ４＋８＝１２ ②十の位に１くり上げる。 ③十の位を計算します。 １＋３＋２＝６ 答え　６２	○児童の反応を受けながら説明をする。 ○数え棒で数量をつかむ。 ○デジタル教科書の活用 【研究内容①に関わって】

児童にモデルにさせたい説明は指導案に明記した。明記することで、「型」が明確となる。



半具体物を用いながらの説明

時間を明記することにより、端的かつ的確な説明を意識できる。

「教師からの説明」と言っても一方的な説明ではない。“数え棒”という半具体物を用いながら、数量感を育てながら説明していく。

３、研究内容②（研究仮説②に関わること＝理解確認段階）

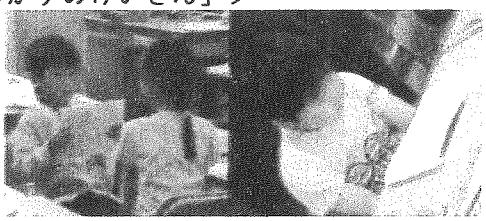
視点１　知識や技能を確実に定着させる学習指導を工夫すること

教師による説明だけでは、「わかったつもり」「生わかり」の状態である。基礎的な知識や技能をより確実に習得させるためには、それらの知識や技能を「行為化」させなければならない。行為化することで知識・技能が向上する。ここで言う行為化とは、類似問題に取り組んだり、説明するなどの言語活動を行ったり、作業をしたりする算数的活動を行うことである。

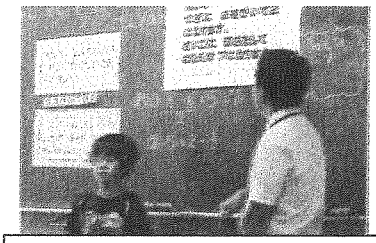
理解確認段階では、理解深化問題・課題を取り組む上での足場を作ることを目的とする。

＜実践例　１年生算数「３つのかずのけいさん」＞

３つの数の加減混合の計算を説明する。（説明段階）



個人で問題を解き、個人やペアでやり方を確認する。（理解段階）



全体で計算の仕方を確認し、理解深化問題の足場を作る。（理解確認）

（２）研究内容③（研究仮説③に関わること＝理解深化及び自己評価段階）

視点１　発問や課題を工夫すること

身に付けた知識や技能を足場に理解深化問題や課題に取り組ませる。ここで提示する問題や課題は、理解確認までの知識や技能を足場を基にして考える発展的な問題・課題、つまり「考えがいのある問題や課題」「ジャンプの課題」になることが重要である。

理解深化問題や課題を通して、「生わかり」の状態から「本わかり」となる。

＜実践例　６年生算数「比とその利用」＞

【理解深化問題】
レモンと炭酸水と砂糖を使って、レモン炭酸水を作ります。重さの比を２：１０：３にします。レモンを３０ｇにすると、炭酸水と砂糖はそれぞれ何ｇいりますか。

理解確認段階では、二つの数量を扱った。理解深化課題では、三つの数量を扱うことにより、線分図を描き、比の一つ分を求める有用性をより実感できることをねらった問題である。

視点２　学習形態を工夫すること

理解深化段階や理解確認段階では、学習形態を工夫し、言語活動を充実させることで学びが深まっていく。全員の学びの保障にもつながる。

教材の特性や児童の実態などを見極め、個別学習、ペア学習、グループ学習、一斉学習などの学習形態を工夫していく。その際に、学習形態のねらいを明確にすることが大切である。

グループ学習のための活動にならないようにすることが大切である。あくまでも、全員が深い学びになるために行わなければならない。

＜実践例　５年生算数「分数」＞

理解深化10分	○理解深化問題に取り組む。 チャレンジ問題 2/3÷4 面積図も使って計算の仕方を説明しよう。 ・解けた子は自由にペアやグループを作り、解法を交流し合う。 ・自力解決が難しい子はヒントコーナーに集まり、ヒントを手掛かりとして公式を使って問題を解く。 ・全体交流をして、解法について確認する。 ・必要に応じてさらに発展問題に取り組む。 1・3/4÷3（帯分数÷整数）	○交流は答え合わせで終わらず、面積図を使って公式の意味を捉え、答えを導き出すことの説明が主であることを意識させる。 【研究内容④に関わって】 （※ペアまたはグループ） ◎面積図をかくことができたか。【数学的な考え方】 ○実物投影機を活用する。 【研究内容①に関わって】

ねらいのない学習形態の工夫は無意味である。

まずは個人で考え、ペアなどで交流した。

その後、学級全体でも児童が自分の考えを説明する時間も保証した。

学習形態のねらいを意識した学習展開を行うことにより、深い学びになることを目指している。

視点３　協同学習を取り入れること

本校では、協同学習の理念をわかりやすく理解するため、以下の５つを基本的要素とし、協同学習か否かを意識し、授業を展開している。

協同学習　５つの基本的要素

①活動がお互いのためになっているか？（促進的相互依存関係）
②全員参加か？（対面的な相互作用）
③関わり合いがあるか？（個人の責任）
④盛り上がっているか？（対人技能や小集団の運営技能）
⑤よりよいものを求めているか？（集団改善手続き）

＜実践例　３年生算数「あまりのあるわり算」＞

理解深化20分	○理解深化問題を解く。 A　４３÷６＝６あまり７ B　２６このあめを、１人に３こずつわけると、７人にわけられて、５こあまります。 ２つとも間違いです。間違いをなおしましょう。そして、間違いの理由を説明して下さい。	◎余りは、いつもわる数より小さくなることを理解することができる。【知・理】 ○グループ隊形になり協同学習を促す。【研究内容③に関わって】（＊グループ） ○画用紙に貼った問題を１枚ずつ配る。 ○２人もしくは１人でどちらか１つを挑戦する。

課題を２つ提示することにより、交流の意義をもたせた。説明する目的が生まれ、関わり合いが生まれ、活発な交流となることをねらった。

（３）研究内容⑥（研究仮説③に関わること＝理解深化及び自己評価段階）

算数ふりかえり名人

どんなことを書こうかな

○分かったこと。大切な事。
○できるようになったこと。
○自分の頑張り。
○わからないこと。

これができたら上級者

○前の学習とのつながり。
○似ているところ。
○違うところ。
○生活の中で役立てられそうな場面。

最後の指導過程は、授業で学んだことや大切に思ったことを振り返る活動を行う。振り返りは、原則として個人で行う。

授業の最終目的は、個人による習得・活用である。「強い個人」を作ることである。その最終目的を達成するためには、個人での自己評価・自己診断が必要である。

自己評価・自己診断を行うことによって、メタ認知を促すとともに、より深い学びになっていくことが期待される。

振り返りのポイントを提示することにより、児童の思考がスムーズになった。大切なことなどを、自分の言葉で表現することで理解が深まっている。

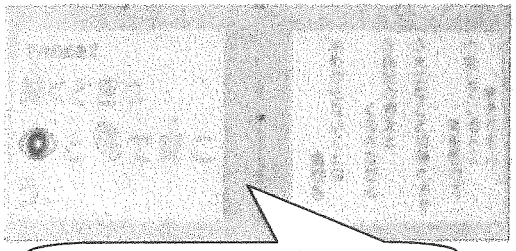
（４）研究を下支えする力の育成

４５分の授業を充実させるためには、それを下支えする力が必要となる。本校は、充実した授業作りのために様々な取り組みを行っている。授業の「足場」を固めている。

今年度は、特に「学習への構え」に力を入れ取り組んできた。

＜実践例　学習への構え＞

話の聞き方や机上の整理の仕方などの学習の構えを定着させるため、月別の重点目標と具体策を全教職員で共通理解している。月末には児童が自己評価を行い、教職員も取り組みを振り返り、達成状況を確認している。



月別の重点目標と具体策を学級掲示し、常に意識できるようにした。

（月別目標の設定と振り返り）

４月	授業前に教科書・ノートを出しておこう	１０月	話し合いの仕方を身につけよう
５月	正しい姿勢で学習しよう	１１月	ノートをきれいに書こう
６月	ノートをきれいに書こう	１２月	＊学級ごとに必要な重点目標
７月	聞くときは、目と耳で聞こう	１月	授業前に教科書・ノートを出しておこう
８月	授業前に教科書・ノートを出しておこう	２月	学校全体で落ちている項目
９月	みんなに伝わるように話そう	３月	＊学級ごとに必要な重点目標

"学習の構え"をふりかえろう（教師用）１１月より

１０月の重点指導は『ノートづくり』でした。家庭学習ノートの他に各教科のお手本ノートが掲示されています。

【集計結果】　（先月ポイント◎高い○やや高い △やや低い ▲低い

	項目	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全校
①	授業前準備用具準備	◎ 4→(4)	◎4 →(4)	◎3.5↓(4)	◎3.7↓(4)	◎3.7↓(4)	◎4→(4)	◎3.8↓(4)
②⑩	授業前後、号令で集中	3.3↑(3.5)	◎3.7→(3.7)	◎3.5↓(4)	◎3.7↓(4.3)	◎4 →(4)	3.5↓(3.7)	◎3.5↓(3.9)
③	姿勢	3 →(3)	3 ↑(3.3)	3 →(3)	3 ↑(3.7)	3 →(3)	△2.7↓(2.3)	3 ↓(3.1)
④	話を聞く	△2.7↓(3)	3.3→(3.3)	3 →(3)	3→(3)	3.3↑(3.5)	3.3→(3.3)	3.1↓(3.2)
⑤	時と場に応じた話し方	3 ↑(3.5)	3.3→(3.3)	◎3.5↑(3)	3.3→(3.3)	3 →(3)	▲2 ↓(2.3)	3 ↓(3.1)
⑥⑨	言語環境	3 →(3)	3 ↑(3.3)	3 →(3)	3.3→(3)	△2.7↓(2.5)	▲2.3↓(2.7)	2.9→(2.9)
⑦	字の丁寧さ	3 →(3)	3.3→(3.3)	3 →(3)	3.3→(3.3)	△2.7↓(3)	△2.7↓(3)	3 ↓(3.1)
⑧	ノート整理の仕方	3 ↑(3.5)	◎4 ↑(4.7)	3 →(3)	3.3→(3.3)	△2.6↓(3.5)	3.3→(3.3)	3.2↓(3.4)

毎月の達成状況を児童も教師も振り返っている。振り返ることにより、目標を常に意識し、次へとつなげていくねらいがある。

Ⅳ　成果と課題

＜成果＞

○説明の際、視覚的な教材や教具、デジタル教材などのＩＣＴが非常に有効である。

○協同学習を取り入れ、工夫された理解深化問題を行うことにより、上位層は説明することで理解が深まり、下位層は理解のきっかけをつかむことができた。

○平成２６年度全国学テにおいて、全てにおいて“かなり高い”“高い”の結果なった。
　また、無回答率が１％以下と非常に低かった。ペアで説明し合う活動を取り入れるなど学習形態を工夫し、ノートに自分の考えを書く活動を重視したりして、一人ひとりの学びを保障した成果である。

【平成 26 年度全国調査における全国との比較】

かなり高い（＋７以上）		●	●	
高い（＋５～＋７）	●			●
やや高い（＋３～＋５）				
ほぼ同様上位（＋１～＋３）				
ほぼ同様（±１）				
	国Ａ	国Ｂ	算Ａ	算Ｂ

○２年生以上の標準学力テストにおいても、全国と比較し、ほぼ同程度になった。また、活用が前年度と比較し、どの学年も１０ポイント程度向上した。

＜課題＞

●教師からの説明が一方的になり、算数的な活動を伴わず、児童に興味関心をもたせることが出来ないことが課題である。

●子どもの説明活動が、「読む」活動になり、意味理解につながっていない。子どもが実感するような理解を保証する必要がある。

●「どのような理解深化問題が適切か？」が非常に難しい。難易度が上がると、多数の子が理解できない。一方で簡単すぎると、理解を深めたとは言い難くなる。理解深化問題の難易度、バリエーション、提示の仕方などを検証する必要がある。

●自己評価の時間確保ができず、省略することがある。授業を逆算する形で、子どもの学びを深められる必要がある。

室蘭市立本室蘭中学校

１．研究主題

基礎的・基本的な学習事項を身に付け、 筋道立てて考えたり表現したりする生徒の育成 ～授業工夫の実践による基礎的・基本的な学習事項の定着を通して～

（仮説１）　各教科において、生徒が目標を確実に達成するための授業工夫・改善を行うことで、生徒は学ぶ意欲を高めるとともに基礎的・基本的な学習事項を身につけることができるだろう。

（仮説２）　各教科において、基礎的・基本的な学習事項を活用する場面や方法を工夫することにより、生徒は筋道立てて考えたり表現したりすることができるであろう。

２．研究主題設定理由

平成２３～２５年度の３カ年の校内研修では、次のような研究主題を設定した。

学びを実感する生徒の育成　～言語活動の充実を通して～

言語活動を充実させることにより生徒自身が自らの思考の流れを論理的に理解することで学びを実感し、それによって確かな学力も身についていくのだろう、という仮説のもと研究を行った。主に確かな学力の３要素の「思考力・判断力・表現力の育成」の部分を重視した内容となった。その結果、次のような成果と課題を得ることができた。

＜主な成果＞

・生徒自身が、学習事項に対して「なぜそうなるのか」や「どのように考えたのか」を、言語活動を充実させることにより客観的に理解し、一層学びの実感をえることができた。

・課題に対し感覚的に取り組むのではなく、論理的に筋道立てて考え答えを導き出そうとする意識を定着させることができた。（授業の感想、ワークシートなどより）

＜課題＞

（生徒に対して）

・基礎的、基本的な学習事項が定着していない生徒は、課題に対して論理的に迫るために必要な学力が身に付いていない。そのため、論理的に考えるという授業自体が非常に難易度の高いものとなってしまう。

・ある課題に対し筋道立てて正答を導き出すことはできるが、その思考の流れを言葉で表現するのは困難である生徒が多くみられ、どのように考えたのかを自ら理解するまでには至らなかった生徒が大半であった。

（教師にとって）

・「思考を表現する」という時間を長めに設定すると、１単位時間内では時間が足りなくなることがあった。そのため反復練習や確認といった学習事項の定着のための時間がとりにくくなってしまった。

・言語活動を意識するあまり、本時の目標と活動がずれてしまう授業が散見された。

これらを踏まえ、今年度は「思考力・判断力・表現力の育成」の前段階として、「基礎的・基本的な学習事項の定着」を重視することとした。論理的に考える力の育成にはまず基礎的・基

本的な学習事項を確実に定着させることが必要であると考え、そのための授業工夫や授業交流を行うことにより授業改善をして行くこととした。

3．具体的な研修内容

(1)　本校における「基礎的・基本的な学習事項」の定義

①　基礎的・基本的な知識や技能

②　前時までの既習事項

③　それら知識や技能を必要に応じて結びつけ、活用する力

(2)　共通の取組

「基礎的・基本的な学習事項の定着」を図るため、授業工夫の具体的な手立てとして、次のことを共通の取組として行うこととした。

①　目標の明確化

各教科で１つの単元を選択し、その単元について「基礎的・基礎的・基本的な学習事項の洗い出し」を行う。それを通して、学習内容の精査と目標の明確化とすることを、共通の取組みとした。また、普段の授業では毎時間目標を板書することとし生徒側と教師側の両方への意識付けを図ることも共通で行うこととした。

・単元を選択　⇒　i　基礎的・基本的な学習事項のリストアップ

ii　それらを踏まえ、単位時間ごとの目標をより明確化する

・授業では、導入の段階で本時の目標を板書し、教師、生徒共に１時間通して明確化された目標からぶれないようにする

②　「基礎的・基本的な学習事項の確実な定着」を意識した学習活動の工夫

目標達成のための「基礎的・基本的な学習事項の確実な定着」を意識した学習活動の工夫を普段から行うものとする。これに関しては教科の独自性を保ちつつ工夫する。

③　目標に対応したまとめ

生徒の本時の学習目標に対しての定着の度合いを確かめるためや、一層の定着を図るために、以下のことを共通の取組とする。

１．まとめの時間を確保すること。

２．本時の目標を達成できたかどうかを確認できるまとめを行い、その中で基礎的・基本的な学習事項のまとめも行う。

３．まとめの方法はいろいろあってよいが、学習内容の定着を確かめられるものとる
（例：目標達成が確認できる問題や実践。生徒自身がワークシートをまとめる。
具体例で学習した学習事項の一般化など。）

4．研究実践

(1)　数学科研究授業（平成26年8月26日　5校時　3学年）

＜単元　中学３年「関数 $y=ax^2$」＞

＜研究仮説との関わり＞

目標の明確化

・目標を授業の最初に板書し、ワークシートに書かせる。

基礎的・基本的な学習事項の定着の工夫

・１，２年次と前時の既習事項のつながりを意識した授業展開をする。

・習熟の程度に応じた課題による反復練習をさせる。

目標に対応したまとめ

・シラバスを活用し、まとめと自己評価をさせる。

＜研究協議より＞

・この研究授業では、目標というマグネットのシートを張りその上で板書したことと、それに加え目標を記入する欄をワークシートに設けたことで、より目標の明確化につながった。
・基礎的・基本的な学習事項の工夫についても、目新しいことはないものの、系統性と前時の学習事項を十分に踏まえた既習事項の復習のあとに課題に取り組ませるという段階を追ったことが、大変効果的であった。
・目標に対応したまとめについては、より定着させるための工夫や、定着を見取ることのできるようなまとめ方が必要。
・授業計画の段階で、「まとめの時間に何をすべきか」というところから考えていく必要がある。
・目標やまとめがどのコースにも書かれていてよかった。
・基礎基本が常に板書されていて、いつでも確認できるようにしているのが良かった。
・板書の構造化にも気を配った方がよい。
・今後どの授業でもまとめ方が大切になってくるので、しっかりと検討した方がよい。

(2)　英語科研究授業（平成 26 年 11 月 18 日　5 校時　1 学年）

＊室蘭市学力向上事業研究奨励校「研究中間発表会」

①　指導案より

＜単元名　　Program 9　A New Year's Visit＞

＜本時における、研究主題・研究仮説とのかかわり＞

指導案に研修との係わりを明記し、共通実践に努めた。

目標の明確化

・目標を板書し、それをワークシートに記入させることにより意識付けをするう
・状況が視覚的にもわかりやすい課題提示の方法を工夫する。

基礎的・基本的な学習事項の定着の工夫

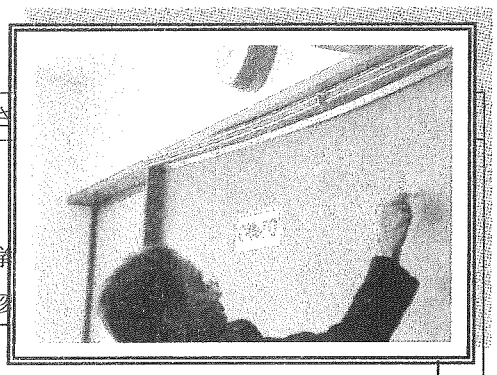
・warm-up のＱ＆Ａで既習事項(be 動詞・一般動詞)の復習を本時の展開を意識して行う。
・ディクトグロス風の活動を取り入れることにより４技能トータルの定着を図ると共に、グループ活動の「学びあい」の機能を生かしつつ、個別支援にあたる。

目標に対応したまとめ

・ワークシートを利用して、実際の使用場面を想定しつつ本時の学習事項の定着を図る。
・自己評価を記入させ、学習意欲の向上を図る。

＜本時の展開＞

	主な学習活動	教師の働きかけ　予想さ
導入	Greeting	英語で挨拶をする。
	Warm-up	
	Q&A　（既習事項の振返り）	・教師の質問に生徒は挙
5分		・be 動詞の主語による変



[本時の目標の提示]

「今していること」を（be 動詞＋動詞の-ing 形）で表現できる

②ワークシートより

Pro. 9 [1]①　　Work-Sheet

Class ____ No.____ Name _____

CAN-DO	

ワークシートに目標記入欄を設け、生徒自身の目標意識を高めるようにした。

Activity 3 （使ってみよう）

○家族に手伝いを頼まれて、断るときのせりふ（言い訳）を考

A（家族の誰か）：　Can you help me?

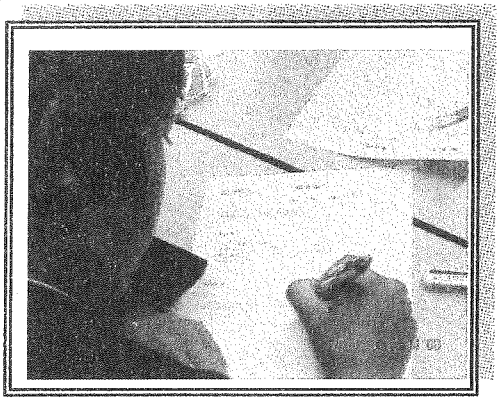
B（あなた）　：　Sorry, I can't.

_____

1．「今していること」を言ったり、書いたりできる。	A	B	C	D
2．グループ活動に積極的に参加することができた。	A	B	C	D

③研究協議より

・板書に CAN-DO などのプレートを利用しているのが、課題の明確化として最適。
・書かせることを中心にということだったが、表現も重要に感じた。
・単語の習得状況はどうなのだろうか？
　→　卒業までの継続した課題である。ビンゴゲームや小テストを活用する。
　　反復も大事だが飽きてしまう。コミュニケーションができることが目的なので、
　　両方をバランスよく学習させていきたい。
・ディクトグロスの活動は他教科でも活用できそうだ。
・視聴覚教材が非常に効果的であった。
・文法事項のリピートとジェスチャーゲームの順序が逆でもよいかもしれない。
・これだけ生徒の反応がよく意欲的なクラスであれば、導入の DVD はなくてもよいのでは？
・小学校でどれだけやっているかを踏まえ、中学校での課題を設定できるとなおよい。
・導入の DVD でイメージを持たせたうえで目標の提示あったため非常に印象に残り効果的。
・英語の場合はこれまで習った単語が書くことができたりいう事ができたりするのが前提となるため、教科の特性としての難しさを感じた。



(3)　特別支援学級技術科研究授業（平成26年11月18日　5校時　はまなす学級）

＊室蘭市学力向上事業研究奨励校「研究中間発表会」

①　指導案より

＜単元名　　「鋳造～オリジナルキーホルダーを作ろう」＞

＜本時における、研究主題・研究仮説とのかかわり

目標の明確化

授業の始めに作業内容を板書し、それをもとに生徒がその日の授業で何を頑張るのか目標設定を行い、目標意識や、安全な工具の使用、それら達成しようとする意識を持たせることをねらいとする。

基礎的・基本的な学習事項の定着の工夫

・金属について、基礎的な内容について復習させ、知識の定着を図る。
・ＭＤＦ加工、鋳型設置の注意点及びやけど等の事故がおきないよう、実習時における注意点を説明するとともに、実習をとおして加工技術の向上、定着を図る。
・鋳造した作品や作業の改善点について意見交換をさせ、次回に生かし、修正していくことで技能の定着を図る。

目標に対応したまとめ

・鋳造作業まとめ（アドバイスカード）の使用し、今日のまとめとしての自己評価、班員の作品へのアドバイスを記入させ、次回の授業において発表させる。これにより、本時の作業についての振り返りと、一層の定着につながると考える。

＜本時の展開＞

（１）目標

ア　全体目標

安全に注意して、低融合金を溶かし、鋳型に流し込もう。

イ　個別目標

生徒	個　別　目　標
A	・班員と協力し、教えあうことができる。 ・作業の方法を理解することができる。
B	・指示された時や名前を呼ばれた時など返事ができる。 ・材料や道具の準備・後片付けができる。
C	・教師や班員の注意を素直に聞き受け入れることができる。 ・道具の名前を知り、安全に使うことができる。

個別の目標を設定し、生徒の実態に応じた指導・支援の充実に努めた。

＜板書計画＞

目標　　安全に注意して、低融合金を溶かし、鋳型に流し込もう。

授業の流れ

①　あんぜんについて
↓
②　どうぐについて
↓
③　さぎょうのじゅんばん
↓
④　いこみさぎょう
↓
⑤　さくひんのてんけん（よいところ、なおしなど）
↓
⑥　まとめ（アドバイスシート）

板書で「授業の流れ」を示し、生徒が次の見通しを抱きながら学習活動に参加できるようにした。

を止めて

・鋳込みの作業中は軍手を忘れずに。

・バーナー
・点火器具（チャッカマン）
・プライヤー
・万力
・軍手（工具を見せながら）

次回の作業について
・アドバイスシートでの交流
・作品の修正

② 研究協議より

・目標が１枚の模造紙に大きく明記されており、授業の大切な部分が明確になっていた。

・緊張感の中、作品作りを成功させることができたのが大きな喜びだったと思う。もし失敗した子どもが出た場合どのような支援を予定していたか？

→あらかじめ空気穴をあけておくことで、失敗が起こらないようにしておいた。

・指導案にある個々の目標に対する評価はどのようにおこなうのか？

→授業の様子から判断することになる。

・授業前から生徒をリラックスさせるために授業者が授業前から子どもたちと交流していた。

・失敗させないように作業をひとつひとつ分けて進めるというやり方もあったかなと思う。

→道具が少なかったことと、作業工程（一連の作業の流れ）を覚えてもらうためにあえて細切れにしないで作業させた。

・研究仮説との関わりの部分においても、安全に終了することができたので、目標達成といえる。

４．成果と課題（研究の１年次目として）

＜成果＞

・全教職員の共通理解の基、前年度までの研修を踏まえた研究主題を設定し実践を進めることができた。

・手立てを明確にした共通の取組を設定することで、全教職員が同じ意識を持って、授業改善・工夫を行うことができた。

・各教科等の指導において、基礎的・基本的な学習事項を身に付けたこと等により、主体的に学習に臨む生徒の姿が見られた。

＜課題＞

・研究推進の継続性について課題が残った。

・教職員が研修の意義をより実感でき、生徒の成果として一層還元できるよう、今後も校内研修を推進していく。

＊１１月に実施致しました研究中間発表会では助言者様を始め多くの参会者から貴重なご意見・ご指摘を賜り、誠にありがとうございました。本校の今後の校内研修に活かして参ります。

室蘭市立高砂小学校

１研究の全体構造図

【研究主題】確かな学力を育てる授業の創造

～話す力を伸ばす国語科の指導法の工夫～

【めざす子ども像】論理的に思考し、意欲的に話す子ども

【研究仮説１】
「読む」単元において読み取りの指針に基づく言語活動を設定することで、言葉を手がかりとした論理的な思考ができるようになるのではないか。

＜研究内容１＞
・「読み取りの指針」の活用
・発問の工夫

【研究仮説２】
相手意識・目的意識を明確にした言語活動を設定することで、意欲的に話すことができるようになるのではないか。

＜研究内容２＞
・「話し上手聞き上手」の活用
・日常的な話す場の設定
・指導事項習得のための効果的な言語活動の設定

２研究主題と副主題

（１）主題・副主題設定の理由

現代的な課題と学習指導要

学習指導要領において、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」が求められ、特に国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実があげられている。

OECD の調査結果による「読解力」の低下の指摘、人間関係に関わる問題が急増している現代の時代背景等から、言語生活を豊かにすることが喫緊の課題となっている。

そこで、本研究では、言語活動を生かすことのできる代表的な教科として国語科に焦点を当て、指導法の工夫を模索することで、豊かな言語能力を育み、確かな学力を育てられると考える。

本研究では、言語活動の中でも「話し合い」に着目した。討論を始めとする話し合いには、総合力が必要である。話し合いを通して他の観点についても力を付けていけると考えた。

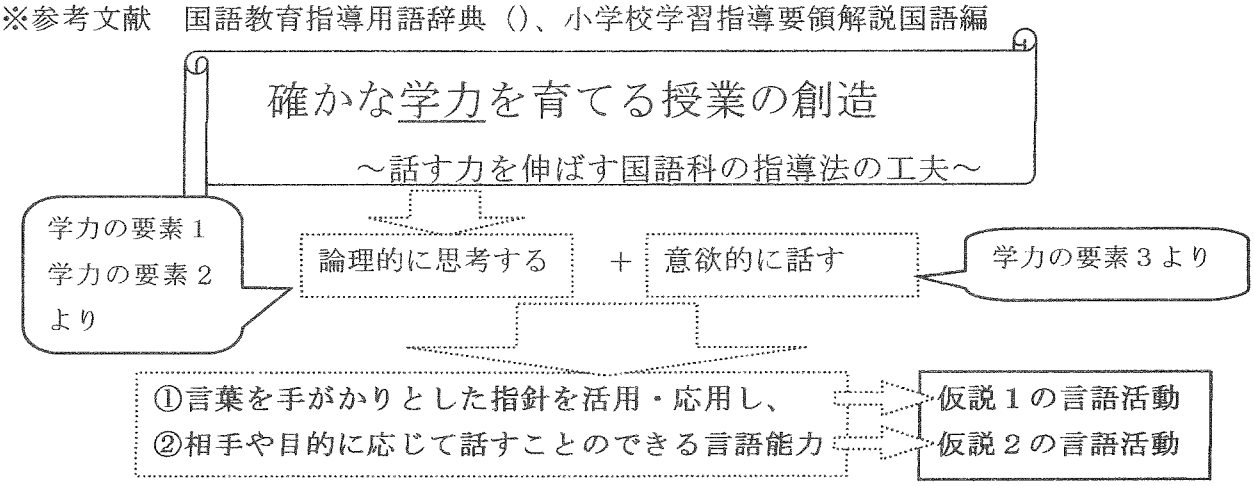
「話し合い」の前提として

ただし、副主題は「話し合う」の前提である「話す」に設定した。

昨年度の研究で「発表する事に対して抵抗がある」ことが挙げられた。本年度はその反省を受けて、話す力に限定することで、子ども達に確かな力を付けようと考えている。

（2）「学力」についての本校のおさえ

※参考文献　国語教育指導用語辞典（）、小学校学習指導要領解説国語編



☆「言葉を手がかりする」という観点を持つため、「読む」単元に限定す

３めざす子ども像・研究仮説・研究内容

めざす子ども像	【めざす子ども像】 論理的に思考し、意欲的に話す子ども
	【研究仮説１】 「読む」単元において読み取りの指針に基づく言語活動を設定することで、言葉を手がかりとした論理的な思考ができるようになる
	＜研究内容＞ ・「読み取りの指針」の活用 ・発問の工夫

言葉を手がかりにするためには「一定の基準＝指針」が必要である。指針があることによって、論路的にお互いの考えを深めることができる。また、系統的に指導ができ、より既習内容を活用しやすい。

光村図書の教科書を活用する。

『ふろく　身につけた力を生かそう―「たいせつ」のまとめ』

①ふろくから読みの項目を取り出す。

②読み取りに必要な用語を教科書からピックアップして加える。

③全学年分を載せた一覧にする。

学習に見通しを持たせ、適宜振り返る場面を設定し、より定着を図る。

この指針をもとに各単元の指導計画を立てる。

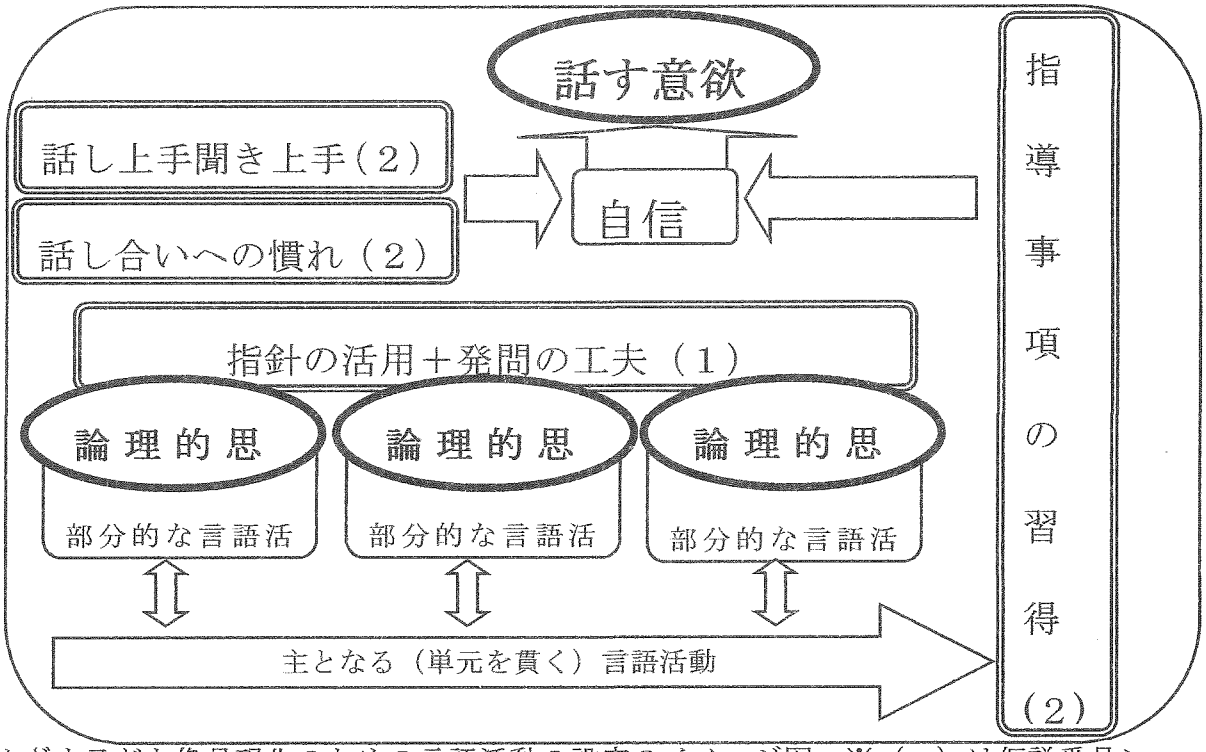
研究仮説２	【研究仮説２】 ＜研究内容＞ ・「話し上手聞き上手」の活用 ・日常的な話す場の設定 ・指導事項習得のための効果的な言語活動の設定

全教室に「話し上手・聞き上手」を掲示する。この話し上手聞き上手は教

科書から抜粋した物である。低中高の３種類がある。目標とする話し方聞き方の指針があることで、子ども達も意識して話すことができる。

また、日頃の積み重ねとして、ブロックごとに話す場の設定を意図的に設定する。

そして、「言語活動を通して指導事項を習得する」ためにも、各単元における指導事項を明確にし、部分的な言語活動が主となる（単元を貫く）言語活動と関連し、「目的意識をもった」活動となるようにする。確実な習得が自信となりさらに話す意欲へとつながると考える。「効果的な主となる（単元を貫く）言語活動の設定」をすることが肝要となる。



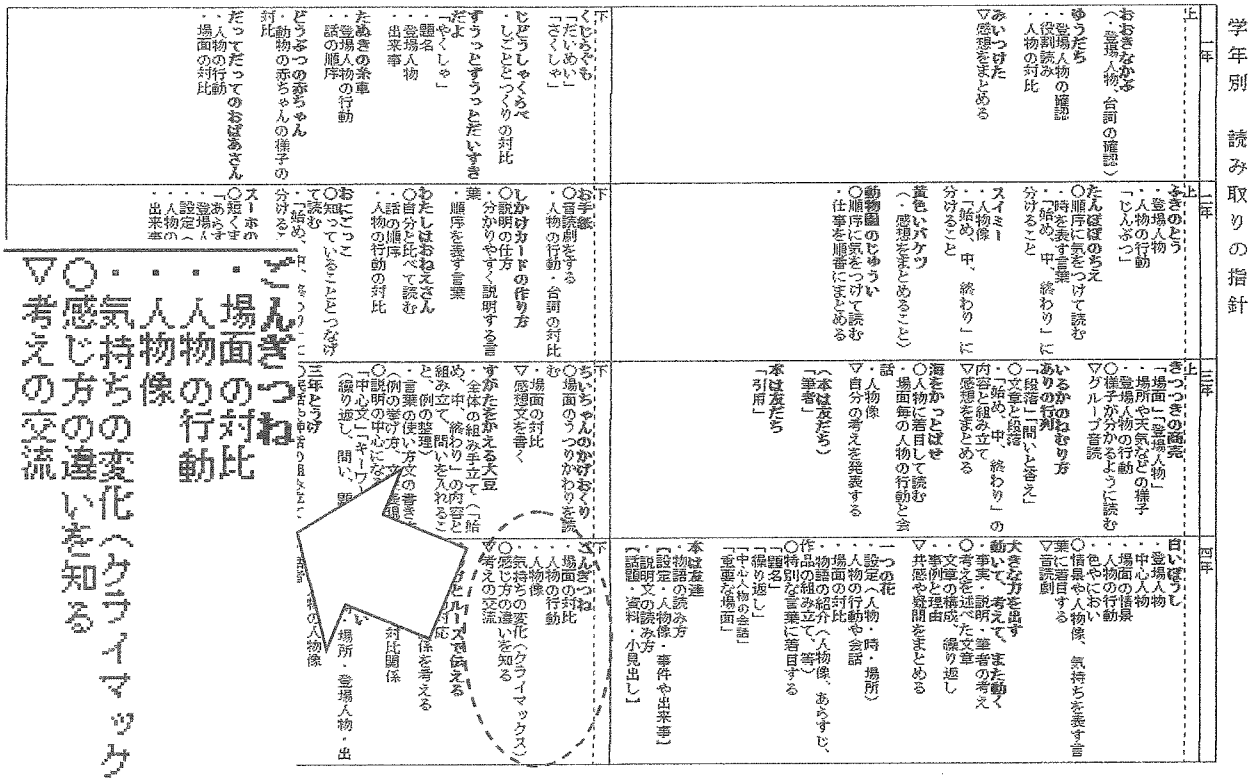
<めざす子ども像具現化のための言語活動の設定のイメージ図　※（　）は仮説番号>

４検証方法

研究仮説１の検証	【仮説１の検証】 「読み取りの指針の一覧票の作成・活用」 →子どものノートの変容で検証する。 「言葉を根拠にした意見や考えをどのくらい書けるようになったか。」
研究仮説２の検証	【仮説２の検証】 「学級の環境作り」 →発表の活発さの変容で検証する。
研究全体の検証	【研究全体の検証】 国語に関する児童アンケートを行う。

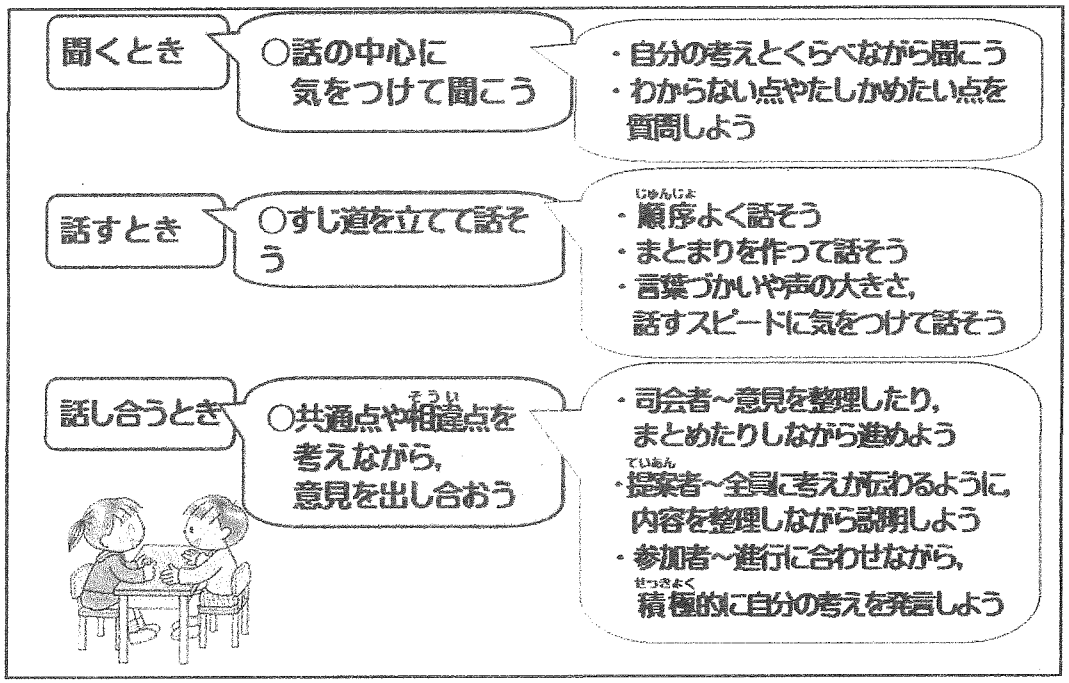
※実施は一学期初めと二学期末の２回。

＜読み取りの指針＞

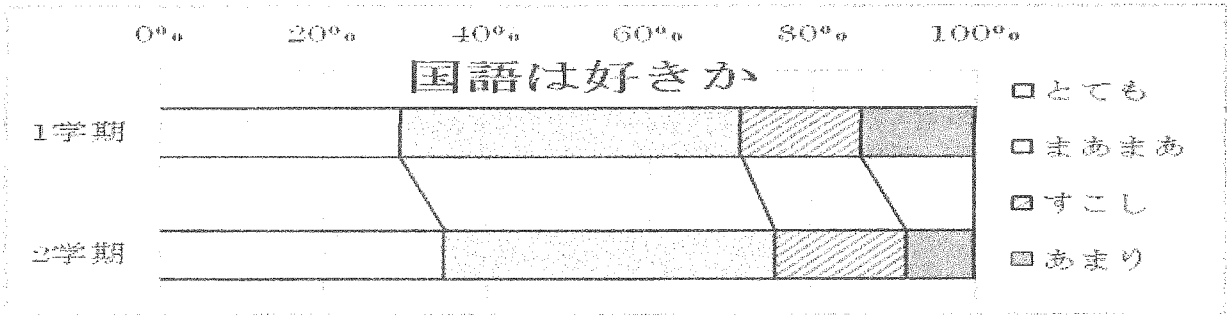


例「ごんぎつね」　・が必修、○が重点、▽が言語活動例

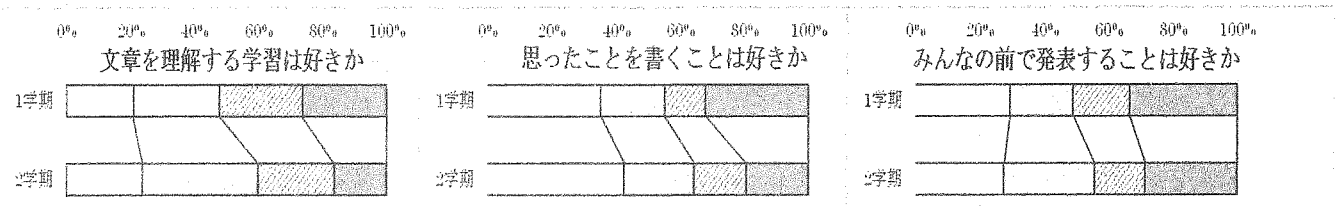
＜話し上手・聞き上手：中学年編＞



＜アンケート結果＞



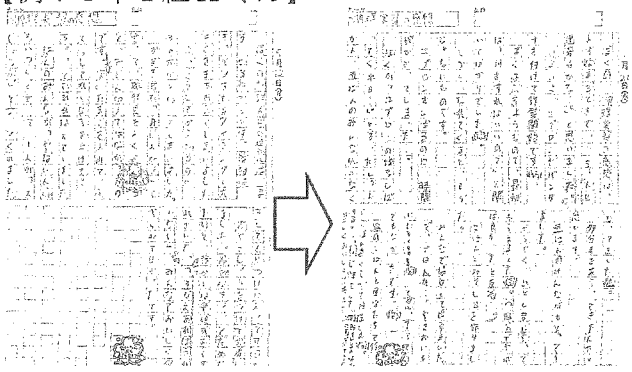
→「とても」＋「まあまあ」５ポイントアップ



→１２ポイントアップ　→１０ポイントアップ　→７ポイントアップ

＜成果と課題＞

【例：５年１組Ａくん】



「５月：出来事の羅列。感想が少ない。」　「１月：生き生きと。あふれる

◎書く活動を設定したことで児童がじっくり考える時間を確保できた。
◎全体に発表する場を多く設定することで、
◎話す場面を設定することで、聞く姿勢が高まり、感想や質問が多く出てくるようになった。
◎指針に沿ったワークシートを使うことで、児童が見通しをもって書き、発言することができた。
◎単元をつらぬく言語活動を行うことにより、読み取りの目的意識をもてるようになった。
◎物語や説明文を読む際、理由や気持ちなどを教科書の記述をもとに考える力が身についてきた。
◎手がかりをもとに考えることを焦点化することで、一つのことを深く考えることができるようになった。
◎相手を見ながら話したり聞いたりするなど、相手を意識した話し方をするようになってきた。
△話す型を決めることでより児童が積極的になれるのではないか。
△単元によって貫く言語活動と部分的言語活動のつながりが薄い。 軽重を付ける必要がある。
△考える手がかりになる資料の提示や見本の提示、また基準の提示とその徹底が不十分だった。
△単元の中で「重点の提示」と「ゴールの提示」が弱く、児童の主体性を十分に引き出せなかった。
△話し上手聞き上手については、児童にあまり浸透させることができなかった。

研究のまとめ

アンケートでは、全項目で増加が見られた。非常に大きな成果である。また、二項目「文章理解（読むこと）」「書くこと」で二桁の増加が見られた。そして、「発表（話すこと）」で７ポイントの増加である。読むことと書くこと、そして、話すことの関わりが見えてくる。

事後研や各ブロックの成果と課題から、あるキーワードが浮かび上がる。

「見通しの明確化」

である。学習者（児童）は見通しが持てると分かりやすい。つまり、理解力、意欲が向上する。研究内容の３項目「読み取りの指針」「話し上手・聞き上手」「目的意識～主となる言語活動の設定」に沿って述べる。

まず、研究内容１で「読み取りの指針」を活用したことにより、「読む」学習の重点がはっきりとした。大きな成果を得たと考える。

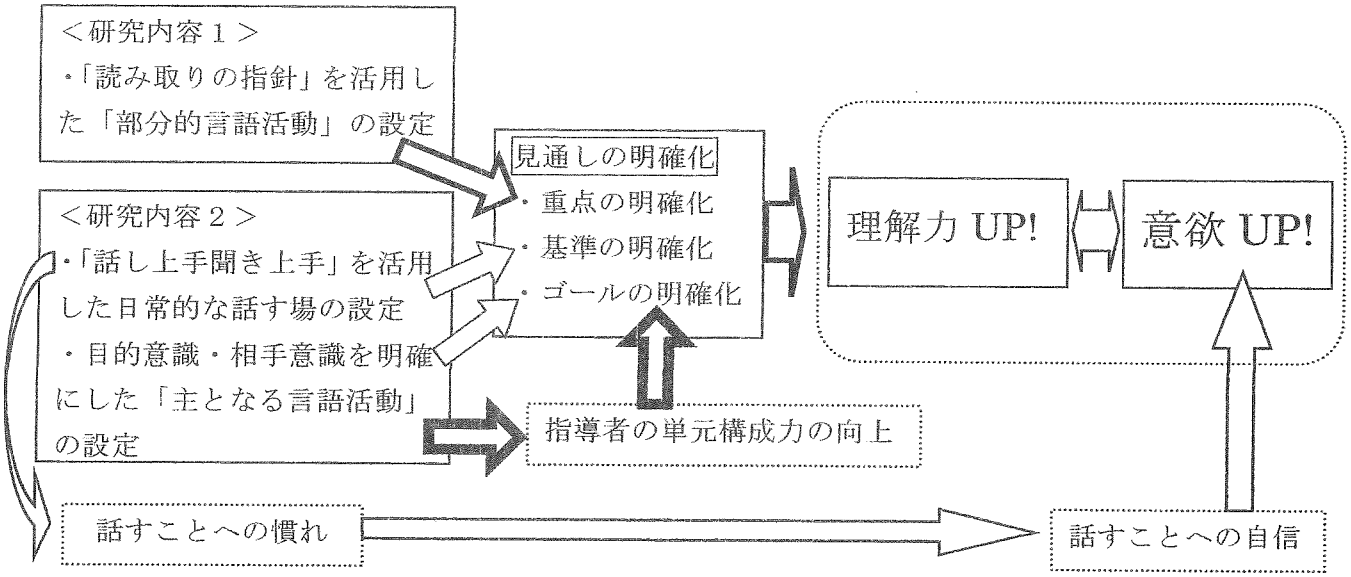
次に、研究内容２で「話し上手・聞き上手」を活用したことにより、どのように「話す」とよいかという基準がはっきりした。同時に、「日常的な話す場の設定」により、「話す」ことになれ、自信をもつことができた。

そして、研究内容２「目的意識・相手意識を明確にした主となる言語活動の設定」も大きな成果も得たと考える。これにより、最終的な活動や目標が明確になった。いわば、ゴールの明確化である。これにより、子ども達はより主体的に学習に取り組むことが出来た。主体的になったことで意欲も向上し、理解力も向上した。

以上から、理解力の向上には意欲の向上が欠かせないこと。意欲の向上のためには、**「分かりやすさ」**と**「主体的に関わらせること」**が必要だと言える。

３項目の効果・手応えを感じた一方で、取り組みが不十分・未徹底だった、という課題も挙がった。子ども達に確かな力を付ける為には、各項目を次年度以降も継続して取り組む事が肝要である。

「研究成果のイメージ図」



※線が太いほど効果・手応えがあった取り組みや要素

室蘭市立高平小学校

１．研究主題

熱心に考え、取り組むことのできる子の育成

～「気づき」を引き出すために、積極的に教え、自ら考え、わかる喜びを味わえる学習を通して～

２．研究主題について

「気づき」を引き出す・・・「気づき」を引き出すための様々な経験をさせ、考える視点を意識づけする。

積極的に教え・・・・・・・「できる・わかる」状態にするために，テンポ良く積極的に教える。

自ら考えわかる喜び・・・・自力でできるようになった自信と楽しさを味わわせ，次への意欲の源とする。（好きこそ物の上手なれ）

この３点を意識して授業することにより、熱心に取り組むことができる子の育成につながる。

３．研究主題設定の理由

平成２２年度まで、「多様な意見や考えを交流しながら高め合う子どもたち」の育成を掲げた研究の中で、自分の考えを生き生きと表現したり、考えを書いてまとめたりする力に課題が残った。

平成２３年度から３年間は、「伝え合う・書く活動」を柱に言語活動の充実に取り組んできた。1年次は国語、２年次は算数・社会・理科、そして、３年次は算数を窓口に、「子どもたちに自分の考えをもたせ、グループ活動で考えを交流し、全体で話し合う」という基本的な授業形態の中で、一つ一つの活動に時間をとられたり、身に付けさせ、積み上げていく力とその指導の視点が明確にできなかったりという課題を残してきた。

そこで、今年度は、算数科に教科をしぼり、子どもたちの「気づき」を大切にしながら、積極的な指導を意識し、「できる・わかる」状態をつくることで意欲を高めたり、教えたことをもとに自力で解決できるようになった自信や楽しさを味わわせたりする授業づくりを目指したいと考え、この研究主題を設定した。

４．研究における目指す子ども像

○　しっかり聞き、学び方を理解し、定着を図る子

○　自ら考え、進んで表現し、学び合う子

○　学習したことを振り返る子

5．仮説

① ふれあいを重視し、信頼を基盤とした学級経営をすることで、いわゆる「指導が入りやすい状態」となり、積極的な指導を理解しやすくなるであろう。

② 積極的に指導することで、課題解決に向ける意欲をもち、学習の理解・定着につなげることができるであろう。

③ 「できる・わかる」を実感することで、意欲につながり、その意欲と自分なりの気づきで、課題を自力解決できるであろう。

④ 自力解決したことを伝え合うことで、お互いに学び合うことができるであろう。

⑤ 評価活動の時間を確保し、工夫することで、学習内容定着の振り返りや次への意欲につなげることができるだろう。

6．研究内容

本校の研究においては、東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授の「教えて考えさせる授業」の手法を取り入れて、すすめていく。

（1）「教えて考えさせる授業」になぜ取り組むのか

「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない。」

近年の授業は、課題提示→思考場面というスタイルが主流であったが、「水辺に行く方法から自分で見つけなさい」という部分に困難さを覚え、学習の出だしから躓きいわゆる「お客様」として授業に参加する児童がいたのではないか？

まずは、水辺に連れて行き（課題を解決するための武器を身につけ）、自ら水を飲む（自分なりに熱心に考え、解決する方法を考える）子どもたちを育てていきたい。

水を飲むことは、自分の意志である。この意志の源となるのは意欲である。そして、意欲の源となるのは、「できた・わかった」ことを実感する中でつけた自信と楽しさである。この経験の繰り返しで、自ら水辺に行き、水を飲む（経験を元に気づき，主体的に考える）事ができるようになると考える。

（2）「教えて考えさせる授業」をつくるための視点

一単位時間を「教える」段階と「考えさせる」段階の二つの場面に分け設定した。

＜教える段階＞

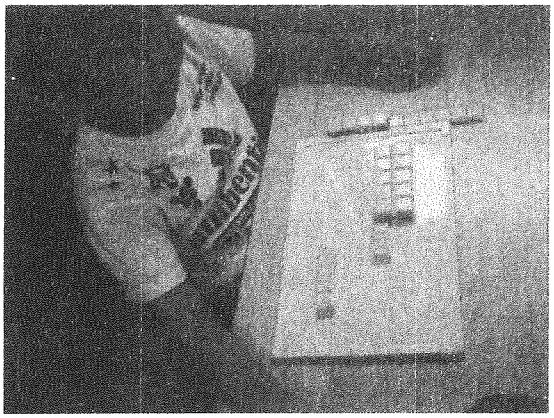
◇児童が課題を解決していくために、学習内容を伝える段階。この段階の視点は、

・児童が誤解しやすい内容をどう教えるか。
・難しい課題をいかに分かりやすく教えるか。

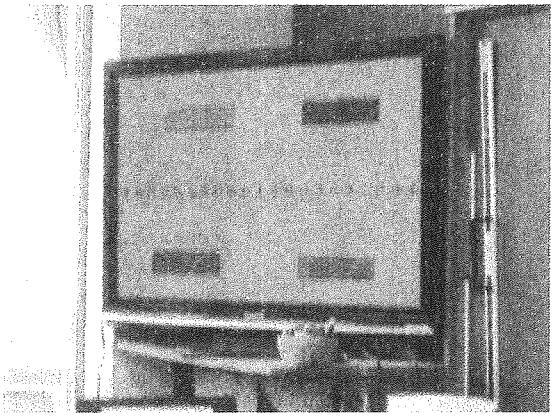
◇そのためには

・積極的に教える内容と考えさせる部分の明確化（教科書研究）
・ICT の活用
・算数的活動
・対話的な説明
・児童の実態の把握

研究の内容1…仮説②の検証
・教科書研究の仕方
・積極的に指導する事項の明確化
・児童実態把握の方法



〈「教える」段階でのパソコンの活用と算数的活動〉



＜考えさせる段階＞

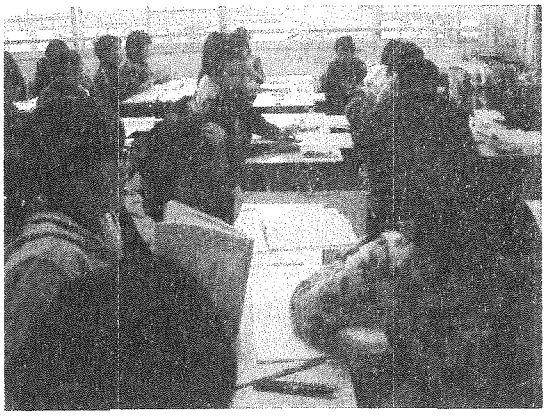
（ア） 理解確認

◇「人に説明できるかどうか」が、理解確認の判断基準となる。

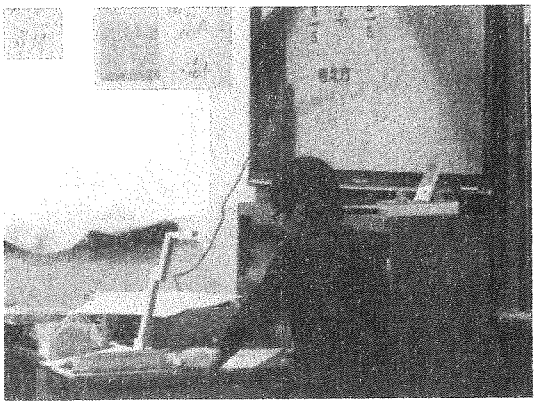
・児童自身が自分で理解できているか確認するにはどうするか。
・教師が、児童の理解を把握するにはどうするか。

◇そのためには

・教えた内容をペアなどで説明し合う活動を行う。
・この段階で理解できなかった児童は、教え合い活動で理解を図る。
・理解している児童によるミニ先生タイム（児童による教示）



＜ペア学習＞



＜ミニ先生＞

（イ）　自力解決（理解深化）

◇考えがいのある課題を自力で解決する段階

・発展的な課題の設定をどうすればよいか。
・試行錯誤による技能を習得させる課題の設定をどうすればよいか。

◇そのためには

・教材研究
　（教科書の発展問題や間違い探し、穴あき問題の工夫）
・教える段階との整合性を考える。

研究の内容２…仮説②③④の検証
・思考を助け，定着を図るためのノート指導に連動した効果的な板書の

＜板書の形式の例＞

6/30 P46 ㋒	53－26をひっ算でしてみよう。 53 －26 一のくらいは一のくらい 十のくらいは十のくらい どうしで計算	⑥① 63　① －26　② ③ ※　自分で理解し言葉で説明できるか、ペアなどで確認し合う。	㋺ ⑥①いがい
㋕	ひっ算のしかたを考えよう。 53　①　一のくらいは、ひけない。 －26　②　十のくらいから1くり下げる。 13－6＝7 ③	㋟ 一のくらいどうしでひけない時は、十のくらいからくり下げる。 ㋛ 35　① －27　② ③	㋭

○板書、ノートの項目を統一し、全校で共通にする。

課題→か・課　問題→も・問　自力、自分→じ・自　（友達→と・友）　まとめ→ま

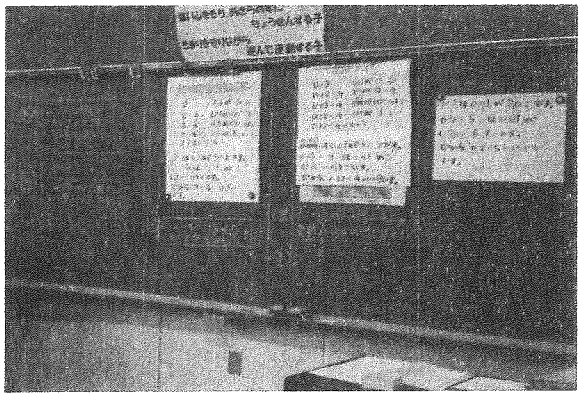
練習→れ・練　振り返り→ふ

○色分けをする。

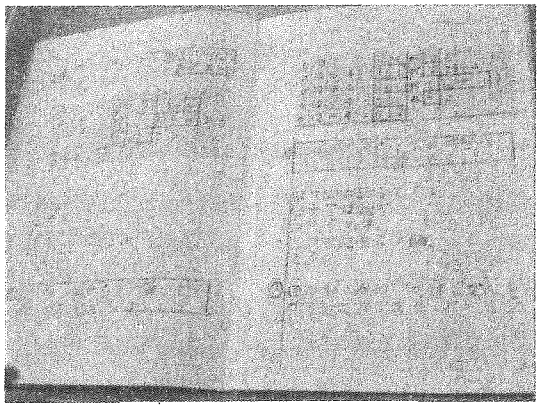
課題→青で囲む　　まとめ→赤で囲む

○ノートの例

6/30 P46 も	53−26をひっ算でしてみよう。	⑥ ま	① 一のくらいどうしでひけない時は、十のくらいからくりさげる。
か	ひっ算のしかたを考えよう。	れ ふ	・縦線をひく。 ・日にちを書く。 ・ページを書く。 ・項目、色を板書と同じにする。



＜ノート指導に連動した板書＞



＜児童のノート＞

（イ’）伝え合う（協同解決）

◇自力解決したことを伝え合い、協同解決する段階

・充実した協同解決にするにはどうすればよいか。

◇そのためには

・協同学習の確認事項

（ウ） 自己評価

◇理解状態を自己診断する段階

・メタ認知の力をつけるにはどうすればよいか。
・教師の授業力向上に生かすにはどうすればよいか。

研究の内容3…仮説⑤の検証
・自己評価（自己診断）の
スタイルの確立

◇そのためには

・発達の段階に応じた、自己評価（自己診断）のスタイルの確立

7．成果と課題

成果

＜内容１＞

・ブロックごとに、どの部分を、どのような手段を使って教えるかを充分に検討することにより、子どもたちに教える部分を明確に示すことができた。
・出だしの「教える」の部分でどの学年も工夫されている。前時までの大切なことが子どもたちの目にふれるように掲示されたり、それまでやってきた学習をテンポよく復習したりしている。
・実物投影機などの ICT の活用がなされ、子どもたちの理解につながっている。
・「説明の型」を教師側から示すことで、子どもたちの思考の手助けと「教える」部分のスムーズな流れにつなげることができた。

＜内容２＞

・板書とノート指導を連動させ、全校統一して行ったことにより、子どもたちの理解確認や自力解決の場面で、思考の手助けになったり、進んで振り返ったり、学習の意欲や理解につなげることができた。

＜内容３＞

・学年の実態や発達段階に応じた評価をすることにより、子どもたちの理解度や躓きに気づくことができたり、子どもたちの学習意欲につながったりすることができた。

課題

＜内容１＞

・説明の時間をいかに短くするか。「説明→理解確認」 までをセットで１５分くらいをめやすにする。ここでは、本当に確認だけとする。
・「教える」部分の教科書研究のさらなる充実を図る。いかに短い時間で、大切な部分を理解させられるかが大事である。

＜内容２＞

・ノート指導について、全学年見開きのページで統一することには無理がある。ノートのマス目の違いや計算スペースの確保など、検討が必要である。

＜内容３＞

・評価に要する時間の確保が課題となった。そのためにもやはり「教える」部分の吟味やテンポよく進めることが大切である。

室蘭市立桜蘭中学校

1　研究主題　　人と協調し、よりよく生きようとする心豊かな生徒の育成
～書いたり話し合ったり表現活動の工夫を通して～

2　主題設定の理由

本校は統合３年目の学校であり、校区内の３つの小学校から進学してくる。慣れない人間関係の中で中学校生活をスタートするため、児童期から脱しようとする発達の段階にあるこの時期の生徒にとって、様々な生徒と協調していくことは容易ではなく、時として、人と協調していくことの難しさに悩んだり、自分勝手な行動ゆえに、孤立したりしてしまう様子も見られる。

そこで、道徳の時間を通して、生徒にとって身近で自分の悩みに直結しているような資料を基に自分自身の生き方について考え、感じたことや考えたことを書いたり話し合ったりさせることで、自分自身を振り返り、自らの価値観を見直すきっかけをつくるとともに、生徒は本来もっている仲間とともによりよく生きたいと思う気持ちを高めていくことができると考え、道徳の時間を中心とした研究に取り組むこととした。

3　研究仮説

本校が示す目指す生徒像「思いやりがある生徒」に向け、かつ上述の課題を解決するために、研究仮説を「道徳の時間において、魅力的な教材（資料・教具等）の開発や指導工夫を進めることにより、さまざまな生き方や考え方に共感し、ともにより良く生きていこうとする心情を育むことが出来るであろう」と設定した。そして、具体的な研究内容として、①道徳の指導計画の充実、②「道徳の時間」の充実、③家庭・地域との連携の充実、という三つの柱から迫っていくことにした。

4　研究の基本的な考え

①道徳の指導計画の充実させるため、まず生徒用道徳性アンケートと保護者用生徒の道徳性アンケート、教員用生徒の道徳性アンケートから、生徒の現状把握と保護者による学校の願いを調査・分析した。次に「新道徳性検査ＨＵＭＡＮⅢ」を実施し、生徒の道徳的判断と道徳的心情のより正確な把握を行い、重点とすべき内容項目を探った。さらに、学年が進むごとに生徒の道徳的価値が深まるように、各学年で取り組む学年・学校行事等の体験的な活動等を道徳の授業の中に関連させていくことにした。

②「道徳の時間」の充実に関しては、体験的な活動等を道徳の時間に生かすことが効果的であると考え、次の３つの視点から、「道徳の時間」の工夫を行った。

視点１：導入部では主題に対する生徒の興味・関心を高める導入の工夫をすること。

視点２：展開部では中心発問を追求するにあたって、自らはぐくんだ体験と資料の道徳的価値とを比較・検討し、話し合いの場を設けることで、共感したり葛藤したり気付いたりして道徳的価値の追求を深めること。

視点３：終末部では自らの経験を再度振り返る場面を設けることで、自己の生き方や内面を見つめ、道徳的価値を深めること。

③家庭・地域との連携の充実では、生徒が培った道徳性をしっかりとはぐくむためには、家庭・地域との連携や協力は欠かせないことである。家庭・地域と連携・協力し、地域ボランティア等へ

参加することを通して、生徒に家庭・地域の一員としての自覚を深めようと考えた。

5　実践の内容

(1)「新道徳性検査ＨＵＭＡＮⅢ」による検査と結果分析

生徒の道徳性の傾向を道徳的心情と道徳的判断を調査し、重点的に高めていく必要がある道徳的価値項目を明らかにするために「新道徳性検査ＨＵＭＡＮⅢ」を実施した。これにより、本校の生徒と全国の比較を客観的にとらえられ、実態をより正確に把握できるようになった。

検査結果を分析したところ、本校生徒は、第１学年は「節度」、第２学年は「感謝」、第３学年「集団の意義」に関する道徳的価値について重点的に指導することとした。

(2) 保護者と教員を対象とした道徳アンケートの実施

学校と家庭が連携し、生徒の道徳性をよりよく向上させることを目的に保護者と教員を対象とした道徳アンケートを実施した。保護者と教員のそれぞれのアンケート結果の比較からは、共通して生徒に期待する道徳性があることが分かった。

生徒に期待する道徳性	保護者	教員
友情の尊さを理解して、心から信頼し合える友人をもち、互いに励まし合うこと	32.1%	30.8%
学級や学校の一員としての自覚をもち、協力してよりよい学級になるように努力すること	20.8%	30.8%

＜教員対象のアンケートから＞
・私たちと生徒の現状の認識にズレがある。このズレを少しでも埋める必要があると感じた。
・集団に関する内容の指導の充実を図る必要があることを改めて感じた。

【保護者及び教員を対象とした道徳アンケートの結果】

(3)道徳の指導計画の充実（年間指導計画について）

体験的な活動等を生かした道徳の時間の工夫を行うために、年間指導計画の中に、体験的な活動等の枠を設け、体験的な活動等と関連する題材を指導する時期を合わせる。

第2学年道徳の時間　年間指導計画

年間授業時数	35時間	学年重点目標	感謝と思いやりの心をもち、時と場合に応じた言葉使いや行動をとろうとする生徒の育成
副読本	明日をひらく（東京書籍）		
副教材	私たちの道徳（文部科学省）		

月	主題名	資料名	項目	ねらい ※中心発問例			
	よりよい社会の実現	住みよい社会に	4－(2)	公徳心を大切にし、連帯感をもってよりよい社会の実現に努めようとする態度を育てる。 ※マナーがカメラに撮られることがあなたはどのように考えて			
4	望ましい生活態度	ばなしの女王	1－(1)	望ましい生活習慣を身につけ、節度ある生活をしようとする態度を育てる。 ※「ばなし」を直そうと決心したのは、どのような気持ちからだろうか。	入		
	礼儀の大切さ	あいさつ	2－(1)	礼儀が相手を尊重する精神のあらわれであることを理解し、時と場に応じた適切な言葉遣いや言動を取ろうとする態度を養う。 ※女子が、「おはようございます」と教室へ入ってきたとき、どのような気持ちになっただろうか。			
	誠実にやり抜く強い意志	ハチドリのひとしずく	1－(2)	目標に向かって、希望と勇気をもって誠実にやり抜こうとする態度を育てる。※「私は、私にできることをしているだけ」と答え、作業を続けたクリキンディには、どんな思いがあったのだろうか。		P16～21	1
5	人と人との交わり	遠足で学んだこと	2－(5)	個性の異なる人に対しても積極的に心を開き、相手の生き方に謙虚に学ぼうとする態度を育てる。※「みんな違ってみんないい」という言葉を思い出したのは、どのような思いからだろうか。	宿泊研修	P38～43	1
	郷土を愛する心	祭りの夜	4－(8)	地域社会の一員として自覚をもち郷土を愛し、郷土の発展に努めるようとする心情を養う。※関西の人との別れ際に「忘れられない半盆祭りになった」と言ったとき、作者はどんなことが頭に浮かんだだろうか。		P200～205	1
	新しい生命	妹に	3－(1)	かけがえのない自他の生命の尊さを理解し、喜びと感謝の念をもって生命を育こうとする心情を育てる。 ※「わたし」や私の家族の言動には、妹の誕生に対するどのような思いが込められているか。		P102～113	1
	温かい家庭	ごめんね、おばあちゃん	4－(6)	父母、祖父母への学恩と感謝の気持ちを大切にし、充実した家庭生活を築こうとする心情を養う。 ※「おばあちゃんごめんね」という「ぼく」のつぶやきには、どんな心がこめられているか。	避難訓練 中体連	P180～193	1
6	友に学ぶ	クマの赤いぐるみをとめた	2－(3)	友情の尊さを理解し、互いの相手の立場になって考え、行動し励まし合いながら向上しようとする態度を育てる。※クマの赤いぐるみによって「わたし」の相手ゆみに対する気持ちはどう変わったか。	期末テスト	P60～65	1
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	秩序や規律を守ることの大切さを理解し、守ろうとする態度を養う。		P148～1563	1

中心発問から構成された道徳的価値を深められる授業づくりを目指した。

学年行事（宿泊研修）と関連をもたせ、価値項目「２－（５）」の道徳的価値を深める計画とした。

学校行事（避難訓練）と関連づけ、価値項目「３－（１）」の道徳的価値を深める計画とした。

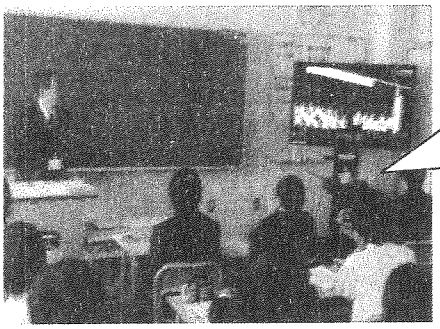
(4) 体験的な活動等を生かした道徳の時間の工夫

そこで道徳の時間において、はぐくまれる価値を体験的な活動等と結び付けたり、資料の登場人物の心情と自ら体験した心情とを重ね合わせたりすることにより、自ら課題を見出し、道徳的価値に気づき、深めることができると考える。また、道徳の時間において、資料を通してはぐくまれた価値は、体験的な活動等を通すことで道徳的価値をさらに深めていくことができると考える。

視点１　主題に対する生徒の興味・関心を高める導入の工夫

ア　体験的な活動等の中ではぐくまれた道徳的価値に焦点をあて、その道徳的価値を方向付けることで、本時主題に対する課題意識をもたせる工夫。

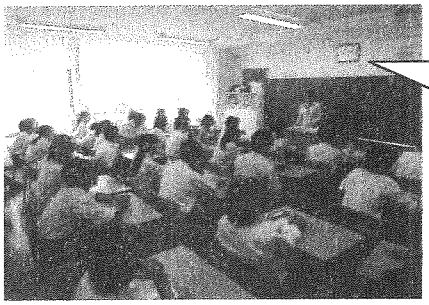
段階	学習活動内容	形態	時間	主な発問と予想される反応 ◎中心発問　○基本発問	支援上の留意点 ◆各視点との関わり
価値の方向付け	・学校祭合唱コンクールのクラスの取り組みの反省を思い出す。	個人	5分	・合唱コンクールの写真（映像）を見せる。 ・恥ずかしかった。 ・自信取れてうれしかった。 ・はじめはうまくいかなかったけどみんなで協力できた。	◆視点１：集団活動と自分の関わりを思い出し今日の課題を理解できたか。



視聴覚教材を使って生徒を集中させ、ねらいにせまっていきます。

イ　道徳的価値に関わる事前アンケートをとり、導入の段階においてクラスの結果を示すことで、その道徳的価値を方向付けて、学習への雰囲気作りを大切にする工夫。

	学習活動・内容	形態	時間	主な発問と予想される反応 ◎中心発問　○基本発問　・生徒に反応	支援上の留意点 ◆各視点との関わり
価値の方向付け	本時の価値に関わる問題意識を持つ。	全体	5分	○今までに「苦手なこと」「不得意なこと」をやった経験ありませんか。 ・勉強　・陸上競技会　・部活　など	◆視点１：事前アンケートを発表し、興味関心を引く。

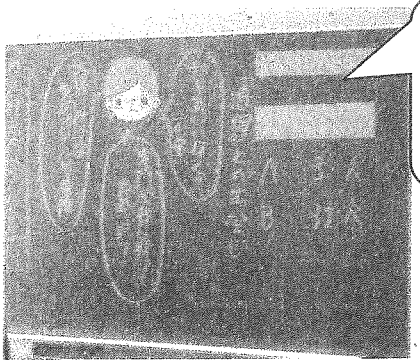


生徒にアンケート結果を予測させ、関心を引きます。

ウ　本時に扱う資料に関わる内容の選択肢を与え、授業前の自分達の考え方から迫り、資料への興味・関心を引く工夫。

本時の展開

	学習活動・内容	形態	時間	主な発問と予想される反応	留意点
価値の方向付け	選択肢から、現状の自分と重ね合わせ、当てはまる方に手を上げる。	個人	5分	・二つの選択肢のうち、今の自分ならこちらという方を選びなさい。 A．親にずっと言われ続けた職業に就くために、進学先も指定されて学校に入学し、言われた職にもついた。 B．自分で決めた学校に入学し、どうしても就きたいという職業ではなかったものの、自分で選んだ職に就いた。 A…○人　B…○人	◆時間をかけに、すぐに手を上げさせる。



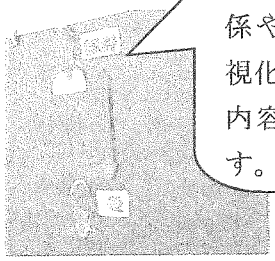
選択肢を視覚的に明示し、人物絵を使うことで、心情把握をしやすくします。

視点２　話し合いの場を設けた展開の工夫

道徳的価値の自覚を深めるために、中心発問と軸としてつながりある発問をし、話し合うために必要な手順を適切に支援することで、より多くの生徒が話し合う活動に積極的に参加できるはずである。そして、話し合う場面と話し合う課題（中心発問）を適切に設定し、生徒の内面を整理していけるような授業改善を進めている。

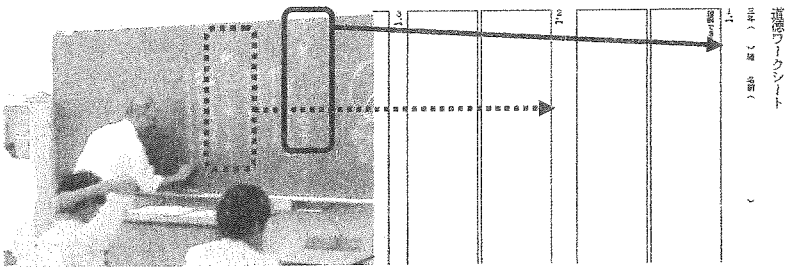
ア　資料の登場人物になって、その行動の理由に焦点をあて、その道徳的価値に共感したり葛藤したりして、その道徳的価値を深める工夫。

・発見・理解	・資料３から相反する立場で考える。	班	20分	◎松井、愛のどちらの意見に賛同するか。理由は何か。 ・松井：最後だからこそ最高の学校祭をつくりあげたい気持ちは皆一緒だから。 ・愛：最後だからこそ全員で協力していきたい。１人任せにするのは間違っている。	視点２　視点３ ・活発化するために意図的なグループ分けをする。 ・板書

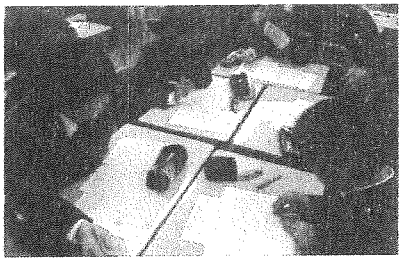


顔写真などを使い、人間関係やそれぞれの立場を可視化することで、話し合う内容を明確にしていきます。

イ　道徳的価値について、深く追求ができるように、生徒一人一人の感じ方や考え方を述べ合うことができる話し合い活動の工夫。

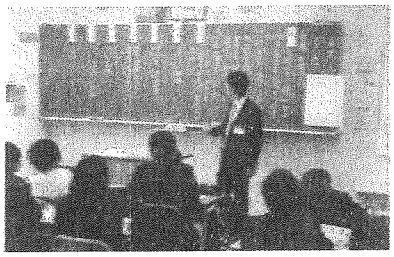


ワークシートに発問内容を直接に書かせることで、生徒が先読みせずに、一つの発問内容（課題）に集中し、その内容にのみ思考する。



話し合いを充実させるために、３人から５人の少人数による班編成で、話し合う時間を十分にとり、お互いの考えや意見を共有する。

ウ　グループ同士での考えを学級全体で共有し、道徳的価値をさらに深めていけるような構造的な板書になる工夫

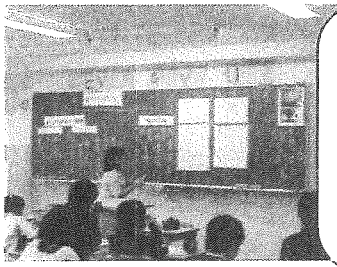


グループでの共有から、クラス全体への共有になるように、生徒が他の生徒の考えに触れ、自分の意見と比較検討し共感したり葛藤したりできるようにする。

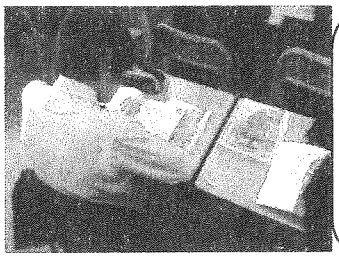
視点３　自分と向き合える終末の工夫

終末部では、道徳的価値に対する思いや考えをあたため、自分の内面と向き合うために、主に書く活動を行い、自らの経験を再度振り返る場面を設けることで、自己の生き方や内面を見つめることができるよう工夫をする。

ア　道徳的価値に対する考えや思いをまとめたり、心にあたためて、自分と向き合える工夫



生徒からでた意見を図式的にまとめることで、授業で考えたり思ったりしたことを、より深く振り返ることができる。



「私たちの道徳」に自分の考えや思いを書く時間をとり、自分の内面と向き合えるようにする。

(5) 家庭・地域との連携・協力

学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校教育全体を通して行われる。さらに、家庭・地域と学校が一体となって道徳教育を推進することにより、生徒の道徳性がよりはぐくまれると考える。そこで、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携・協力をはかるために、次のような活動に取り組んだ。

ア　「地域ボランティア」

生徒が地域の一員としての自覚を高めるために、年３回校区内の地域清掃を実施している。自分たちが住む地域をきれいにすることで、地域への愛着や地域に貢献する機会をもつ。

生徒の感想から（地域ボランティア）

・みんなで楽しく街の掃除ができて、地域の人にも挨拶が出来てよかったし、うれしかった。またやってもいいと思います。
・みんなでやって楽しかったし、地域をキレイにするのは良いと思う。またやりたい。これでいつもの掃除の時間に意識が持てるかなと思う。

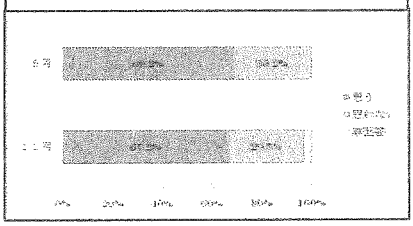
６ 研究のまとめ（成果と課題）

(1) 生徒の道徳性の変容（第１回道徳性アンケートと第２回道徳性アンケートより）

アンケート結果と新道徳性検査ＨＵＭＡＮⅢの結果分析を踏まえた①道徳の指導計画の充実、②「道徳の時間」の充実、③家庭・地域との連携・協力という３つの柱から、研究を進めたことで、結果として生徒の「道徳の時間」に対する達成感が、アンケート結果や授業の感想などにより高まってきている。

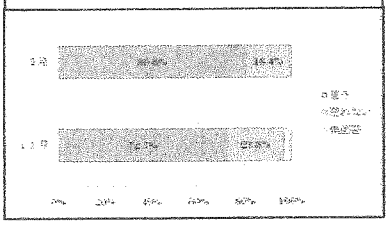
5月「道徳の時間」の学習は好きだと思う

11月「道徳の時間」の学習は好きである



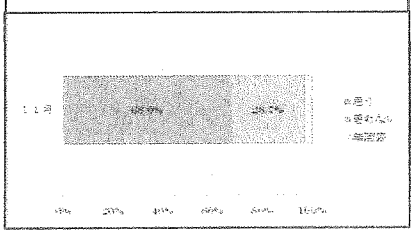
5月「道徳の時間」はためになると思う

11月「道徳の時間」はためになっている

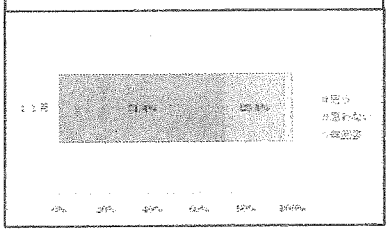


5月のアンケートによる生徒の「道徳の時間」に対する期待感が、１１月のアンケートでは「道徳の時間が好きである」と答えた生徒が６７．２％、「道徳の時間がためになっている」が７２．８％という比較的高い達成感への変容となった。

道徳の授業は、自分を見つめ直すきっかけになっている



道徳の授業後、自分に出来ることはやっている



11月のアンケートにおいて、「『道徳の時間』は自分を見つめ直すきっかけになっている」が６８％、「道徳の授業後、自分にできることはやっている」が７１．５％という結果からも、生徒の「道徳の時間」に対する達成感が見られた。

(2)　道徳教育の全体計画・年間指導計画の工夫

道徳の時間で扱う道徳的価値と体験的な活動等を関連付けた年間指導計画を作成したことにより、道徳の時間を要とした３学年を見通した指導を行うことができた。特に、体育大会や学校祭などの感想や生徒の発言の中に目指す生徒の姿が見えるようになってきた。「新道徳性検査ＨＵＭＡＮⅢ」により、各学級の生徒の実態に即したよりきめ細かな道徳指導ができるようになった。

(3)　体験的な活動等を生かした道徳の時間の工夫

話し合いや学び合いについて、ワークシートに書く時間を十分にとり、自分の考えを整理して他の生徒の考えと比較検討することは効果的であった。話し合いの中で、生徒は他者の考えを尊重し、共感したり、葛藤したりすることを通して学び合い、道徳的価値について深めていくことができた。

(4)　家庭・地域との連携・協力

生徒が地域の清掃を行うことで、地域の一員としての自覚をもたせる上で効果的であった。また、地域の行事に積極的に取り組むことで、地域のために役立ったという喜びをもち、地域の中でよりよく生きようとする生徒を育てることができた。

(5) 今後の課題

○「道徳教育を位置づけた各教科の年間指導計画」や「学級における道徳教育の指導計画」を作成・活用して、その学級にかかわる教職員が学級の指導計画を共通理解することで、よりきめ細かな道徳教育を推進していきたいと考える。

○より効果的な話し合いや学び合いを行うために、班で話し合う場合においては、司会者の問い返しを工夫することで、お互いの発言の奥にある思いを引き出し、思いの交流を図れるようにしたいと考える。

○ 授業参観、全校道徳（講演会等）を通して連携・協力を充実させるために、生徒が地域の行事に参加する機会をさらに増やし、家庭・地域との連携・協力をより充実していきたいと考える。

あとがき

室蘭市学力向上推進委員会において策定された「室蘭市学力向上基本計画」は、平成２５年度をもって終了となりましたが、本市児童生徒の学力に係わって一定の向上が図られたものの、引き続き、課題も多く見られることから、それらの解決を図り、確かな学力を身に付けた児童生徒を育成すべく「第２期室蘭市学力向上基本計画」が策定されました。その中で、「基礎的・基本的な学習内容の確実な習得と活用力の育成、学習意欲の向上」「学習習慣の確立」「学習環境の整備」「学習規律の徹底」「コミュニケーション能力の育成」の５点を課題として位置付けています。

本課題を受け、室蘭市教育研究所における具体的な取組として、「１．言語活動の充実に係わる研究推進」「２．ＩＣＴ活用に係わる研究推進」「３．今日的な教育課題に係わる研修講座の開催、教育情報の収集・発信」の３点が示されました。

本研究所ではこれらの方針を受け、新たに設定した研究主題「確かな学力を育む学習指導の工夫・改善」のもと、解決方策を探るべく今年度から４カ年計画で研究に取り組んでいるところです。

その具体としては、研究部言語グループによる仮説検証授業の実施（小中学校各１回）・言語活動の具体を示したリーフレットの作成をはじめ、研究部ＩＣＴグループによる仮説検証授業の実施（小学校１回：授業改善チーム）・ＩＣＴ活動の具体を示したリーフレットの作成（情報教育チーム）さらに、今日的な教育課題を踏まえた６つの研修講座の開催を実施したところです。

本紀要は、４カ年計画の１年目のまとめとして発刊するものであり、ぜひ、ご一読いただき、室蘭市の子どもたちの確かな学力の向上のためにご意見等をいただけると幸いです。

最後になりましたが、公開授業研究会においてご指導・ご助言を賜りました北海道教育庁胆振教育局義務教育指導班　指導主事、研修講座等の講師や会場校としてご協力いただきました皆様をはじめ、教育研究所にご支援とご協力をいただきました関係各位に衷心より感謝申し上げ、研究紀要あとがきの言葉とさせていただきます。

室蘭市教育研究所
副所長　萩　原　　享